

ゼカリヤ書9-11章「戦争と平和、キリストの到来」

1A 戦いの中の平和 9

1B 虐げる者から守られる主 1-8

2B ろばに乗られる方 9-10

3B ヤワンを攻める勇士 11-17

2A 戦いの中の贖い 10

1B 戦う馬 1-7

2B 強国から贖われる主 8-12

3A 戦いをもたらす牧者たち 11

1B 羊を屠る羊飼いたち 1-6

2B 良き羊飼いを拒む者たち 7-14

3B 愚かな羊飼い 15-17

本文

ゼカリヤ書9章から読みます。9章から11章までを読みますが、ここは「宣告」あるいは、「重荷」と呼ばれるものです。12章からも、宣告という言葉が出てきます。元々は、荷物と呼ばれる言葉ですが、このゼカリヤ書の後半部分には、戦いの預言が数多く出てきます。今も、世界でいろいろな戦いが起こっていますが、その中で平和の希望が欲しいです。これらの戦いの預言の中に、平和をもたらすキリストに関する預言があります。

1A 戦いの中の平和 9

1B 虐げる者から守られる主 1-8

9:1 宣告。主のことばはハデラクの地にあり、ダマスコは、そのとどまる所。主の目は人に向けられ、イスラエルの全部族に向けられている。9:2 これに境を接するハマテにも、また、非常に知恵のあるツロヤシドンにも向けられている。

今、ゼカリヤが預言をしているのは、おそらくは神殿が再建されている時、すなわちペルシヤの時代です。けれども9章から11章において、ペルシヤの次に来るギリシヤ、それからローマについての預言が出てきます。ダニエル書の時と同じですね、ダニエルが生きていたのはバビロンの時代と、ペルシヤの初期でしたが、ペルシヤの次のギリシヤ、そしてローマの預言がありました。ここでは、ギリシヤが帝国となる初代の王アレクサンドロス大王、あるいはアレキサンダー大王が、シリヤから南下してペリシテにまで攻め入っていくところ預言です。ゼカリヤが預言した時から150年以上後に起こる出来事であります。アレクサンドロス王は、東方に遠征して、紀元前330年にイッソスの戦いと呼ばれる戦いで、ペルシヤと戦い、勝利しました。そこは、シリヤのアンティオケの辺

りにある町です。今はトルコの中にあります、シリアとレバノンの国境辺りにあります。そこからアレクサンドロス、南に遠征します。東方にあるペルシヤといつか戦う時には、まず南の地域を攻略して、自分たちの領域を踏み固めないといけないと思いました。

それでアレクサンドロス大王が、シリアを攻めることを今、読んでいます。シリアの首都はダマスコですが、ダマスコの北にあるハデラクを攻めています。そして、ハマテは、ダマスコの北にありますが、イスラエルと境を接することが書かれています。主がモーセに与えると誓われた約束の地に、ハマテが北の境にある町として出てきます(民数記 34:8)。そして、その下にあるのが、今のレバノンにあるシドンであり、そしてツロです。

ここで大事なのは、「主の目は人に向けられ、イスラエルの全部族に向けられている。」という言葉です。しかし実は、ここの直訳は、「人の目は主に向けられ」となっています。ですから、主と人が逆になっています。人々が、アレクサンドロス大王が南に遠征に来る時に、イスラエルが攻め込まれるのか、エルサレムはどうなるのか、注目の的になるということです。ゼカリヤがこのように、150 年以上前に預言しているのですから、洪水のように南に攻め込んで来るギリシヤの軍であっても、エルサレムだけは守られるということに注目させているのだと思います。エルサレムは、「神の平和」という意味を示しています。洪水のような軍隊でも、主は神の平和、エルサレムを守ってくださいます。

9:3 ツロは自分のために、とりでを築き、銀をちりのように積み、黄金を道ばたの泥のように積み上げた。9:4 見よ。主はツロを占領し、その壘を打ち倒して海に入れる。ツロは火で焼き尽くされる。

覚えていますか、私たちはじっくりと、エゼキエル書 26 章で、ツロをアレクサンドロスが攻めた預言を読みました。ここにも出てきています。バビロンがここを包囲していた時に町全体を数百メートル沖にある島に移動させたツロを、土手道を作ることによって島に届き、そこを倒しました。「銀をちりのように積み、黄金を道ばたの泥のように積み上げた」というのは、ツロが極度に富を蓄えていたからです。神は、この誇りを忌み嫌われているのが分かります。

9:5 アシュケロンは見て恐れ、ガザもひどくおののく。エクロンもそうだ。その頼みにしていたものがはずかしめられたのだから。ガザからは王が消えうせ、アシュケロンには人が住まなくなる。9:6 アシュドデには混血の民が住むようになる。わたしはペリシテ人の誇りを絶やし、9:7 その口から流血の罪を除き、その歯の間から忌まわしいものを取り除く。彼も、私たちの神のために残され、ユダの中の一酋長のようになる。エクロンもエブス人のようになる。

シドンとツロを倒してから、ペリシテの町々を倒します。アシュケロン、ガザ、エクロン、アシュドデです、有名なのは、「ガザの攻城」と呼ばれているものです。332 年のことです、それでガザから王

が消えうせたとあります。そして、アシュドテが混血になることが書かれていますが、彼らは純血を誇り、自民族中心主義を持っていました。それに対する裁きです。そして、次に出て来る流血の血についての話は、偶像礼拝におけるいけにえの血のことです。

それから、「ユダの中の一首長のようになる。エクロンもエブス人のようになる。」とあります。これは、エブス人が住んでいたエルサレムの町を、ダビデが攻略して、自分の町にした後のことです。エブス人でアラウナという人が、神殿の丘になるところで打ち場を持っていたのを思い出してください。ダビデがそこを、代金を支払って購入し、それから神殿を建てる準備をしました。そのようにして、エブス人がユダヤ人の中に埋没していきましたが、ペリシテ人もそのようになるということです。つまり、彼らが、信仰の民に飲み込まれるようになるので、それは彼らの民族的誇りに対する裁きであると同時に、救いであるかもしれません。

9:8 わたしは、わたしの家のために、行き来する者を見張る衛所に立つ。それでもう、しいたげる者はそこを通らない。今わたしがこの目で見ているからだ。

7 節まで、洪水が押し寄せるようにシリヤからペリシヤまでなんかしている軍隊の姿が描かれていましたが、イスラエルの地だけは免れています。アレクサンドロスは、ペリシテの町々を攻略した後、エジプトに行きましたが、エルサレムを包囲することはありませんでした。ここに理由があります。「わたしは、わたしの家のために、行き来する者を見張る衛所に立つ。」ということです。主が見張っておられるので、エルサレムの住民は守られるということでもあります。私たちの周りで、どんな騒ぎがあったとしても、主が守ってくださるという約束です。主がご自分の目で見てくださっています。

2B ろばに乗られる方 9-10

9:9 シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子ろばに。9:10 わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。

軍馬に乗ってアレクサンドロス大王は、エルサレムに入城することはありませんでしたが、ここに、「あなたの王」が入ってくるとあります。しかも、ろばの子に乗って来られます。ここにこそ、平和があります。ここに書かれている、イエス様によって成就した部分をじっくり学びました。

そしてここでは、次の節に注目していただきたいです。このように、柔和で、へりくだって、悩みと苦しみを持たれた方が、最後にはイスラエルの周辺と世界に平和をもたらすということです。ここでの預言は、もちろん再臨の預言です。イエス様が再臨されてから実現します。エフライム、つま

り北イスラエルに攻めて来る戦車も、エルサレムに攻めて来る軍馬も絶やされます。そして、支配が海から海とありますが、地中海から死海という意味でしょう。そして大川というのは、ユーフラテス川ですが、そこから地の果てにまで至る平和にあんるといことです。私たちは、へりくだって、優しい方から学んで、この方に付いて行くなれば、必ずや、すべて戦争を主が終わらせてくださる平和の御国に招き入れてくださるといことです。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」と主は言われました。

3B ヤワンを攻める勇士 11-17

そして 11 節からの歴史は、同じギリシヤ時代ですが、もっと先に起こったことです。

9:11 あなたについても、あなたとの契約の血によって、わたしはあなたの捕われ人を、水のない穴から解き放つ。9:12 望みを持つ捕われ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。わたしは二倍のものをあなたに返すと。

まず、捕囚の民であった彼らが、解放されて、帰還することを呼びかけるところから始まります。この預言の時点で既にバビロン捕囚から帰還しているのだから、「あなたとの契約の血」とは、アブラハムと結んだ契約です。創世記 15 章にあります。動物を真っ二つに引き裂いて、その中を主ご自身の火が通り抜けて、そしてアブラハムに土地を与えられる約束を確証されました。そして「水のない穴」とは、エレミヤが落ちた穴のように、元々は貯水槽であったものを地下牢として用いていたものを指しています。つまり捕らわれの身から解放されるということですから、「望みを持つ捕われ人」と呼んでいます。契約の血があるのだから、たとえ捕らわれても、水のない穴に入れられていたようであっても、必ず解放されるということですから、しかも、その報いは二倍、十分に余りある報いを受けます。ローマ 8 章 23 節で、私たちキリスト者も、「心の中でうめきながら、体が贖われることを待ち望んでいる」とあります。

9:13 わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。9:14 主は彼らの上に現われ、その矢はいなずまのように放たれる。神である主は角笛を吹き鳴らし、南の暴風の中を進まれる。9:15 万軍の主が彼らをかばうので、彼らは石投げを使う者を滅ぼして踏みつけ、彼らの血をぶどう酒のように飲み、鉢のように、祭壇の四隅の角のように、満たされる。

これが、マカバイ家の反乱の出来事を預言しているのではないかと考えられます。ここの「ヤワン」とは、ギリシヤ人のことですから。既に私たちは、ダニエル書 8 章にて、2300 日の間、聖所の基がくつがえされるけれども、その後、聖所が元通りになるという預言を読みました。それが、まさに聖書の正典ではなく、外典であるマカバイ記に書き記されています。その勇猛な戦いを読むことができ

ます。わずかな人々、非常に貧弱な武器によって、アンティオコス・エピファネスの軍隊をことごとく打ちのめしました。そしてこの戦いが、次の章 10 章にある、終わりの日におけるユダヤ人たちの戦いの予型となっています。

ここで大事なことは、主が彼らのために戦われているということです。主が、彼らを勇士の剣のようにする。そして、主が彼らをかばってくださる、主が敵の流す血で満たしてくださるとなっていることです。自分たちで戦うのではなく、主が彼らと共におられて戦ってくださいます。

9:16 その日、彼らの神、主は、彼らを主の民の群れとして救われる。彼らはその地で、きらめく王冠の宝石となる。9:17 それは、なんとしあわせなことよ。それは、なんと美しいことよ。穀物は若い男たちを栄えさせ、新しいぶどう酒は若い女たちを栄えさせる。

「その日」という言葉になっています。これは、マカバイの反乱の時を肥えて、終わりの日に彼らが救われることの預言です。「主の民の群れとして救われる」とあります。彼らが羊のように、主を羊飼いとて養われ、導かれ、守られる民としてくださるということです。そして、「きらめく王冠の宝石」と呼ばれることも幸いです。彼らを主は宝の民として召されましたが(出エジプト 19)、王なる主の冠に入れられているように、貴いとみなされます。それで、それは幸いなことであり、美しいことであり、その典型的な姿が、若い女たちがぶどう酒で栄え、男は穀物で栄えるという、農作物が豊かさにされるということです。

2A 戦いの中の贖い 10

1B 戦う馬 1-7

10:1 後の雨のときに、主に雨を求めよ。主はいなびかりを造り、大雨を人々に与え、野の草をすべての人に下さる。

主は、終わりの日に起こることを「後の雨」と例えておられます(1節)。後の雨とは「春の雨」と言い換えることができ、ちなみに「初めの雨」は「秋の雨」と言い換えることができます。収穫を終えた後、秋の雨は次の種を蒔くときに、その土壌を柔らかくしてくれます。そして春の雨は、だいたい三月下旬から四月初めに降る雨ですが、実を結ばせる勢いを与える雨です。ヨエル書において、この春の雨のように、神がご自分の霊をすべての人に注ぐと約束しておられます(2:23,28-29)。聖霊が降り注がれる約束ですが、それは使徒行伝 2 章でその実現を見ました。そしてこれが、教会の中だけでなく、終わりの日にイスラエルの民の間にも起こります。

10:2 テラフィムはつまらないことをしゃべり、占い師は偽りを見、夢見る者はむなしいことを語り、むなしい慰めを与えた。それゆえ、人々は羊のようにさまよい、羊飼いがいないので悩む。10:3 わたしの怒りは羊飼いたちに向かって燃える。わたしは雄やぎを罰しよう。万軍の主はご自分の

群れであるユダの家を訪れ、彼らを戦場のすばらしい馬のようにされる。

主は彼らにこれから戦うための力を与えてくださいます。けれども、その前に、偽預言者や指導者に対して怒りを燃やされます。テラフィムや占いなどによって、むなしい言葉を語る者たちを取り除き、またそれを、羊をさまよわせた羊飼いに例えておられます。彼らに罰を与えた後に、主ご自身がユダの民を強くくださるという約束です。イエス様も終わりの日に、選びの民に対して偽預言者が現れることをお話になりました。「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。(マタイ 24:24)」羊飼いが、羊たちを迷わせること、このことについて神は御怒りを抱いておられます。実に、イエス様の時代、当時の宗教指導者がそのようであったことを、次の 11 章で見ます。

10:4 この群れからかしら石が、この群れから鉄のくいが、この群れからいくさ弓が、この群れからすべての指揮者が、ともどもに出て来る。

これは、ただ一人の方について話しています。ユダの群れから出てこられる方、つまりイエス・キリストです。この方は「かしら石」でした。詩篇 118 篇にあり、福音書や使徒の書簡の中で引用されている、「家を建てる者が捨てた石。それが礎の石となった。(22 節)」という御言葉です。そして、「鉄のくい」は、神殿の中の器具を吊り下げるために打たれた杭のことであり、これもイザヤ書でエルヤキムに対する預言の中でありました。忠実なしもベエルヤキムがキリストを指し示していました。(イザヤ 22:23-24)そして「いくさ弓」もキリストの呼び名です。詩篇 45 篇のメシヤ詩篇にこうあります。「あなたの矢は鋭い。国々の民はあなたのもとに倒れ、王の敵は気を失う。(5 節)」

10:5 道ばたの泥を踏みつける勇士のようになって、彼らは戦場で戦う。主が彼らとともにおられるからだ。馬に乗る者どもは恥を見る。10:6 わたしはユダの家を強め、ヨセフの家を救う。わたしは彼らを連れ戻す。わたしが彼らをあわれむからだ。彼らは、わたしに捨てられなかった者のようになる。わたしが、彼らの神、主であり、彼らに答えるからだ。10:7 エフライムは勇士のようになり、その心はぶどう酒に酔ったように喜ぶ。彼らの子らは見て喜び、その心は主にあって大いに楽しむ。

主が戦われるので、ユダも敵との戦いに勝利します(5 節)。このことについての預言が、具体的に 12 章 4 節から 6 節までにあります。次回の学びで見たいと思いますが、再臨のキリストが戻って来られる前に、エルサレムに攻めてくる世界中の軍隊に対して彼らが奮闘する姿を見ることが出来ます。そして、その戦いによって、救われて、離散の地から連れ戻される人々が与えられます。それで彼らに喜びが、主にあって楽しみがあります。独立戦争が勃発して、特に中東諸国からユダヤ人の帰還が急増しました。そういったことが、終わりの日には大規模に行われるのでしょうか。

2B 強国から贖われる主 8-12

10:8 わたしは彼らに合図して、彼らを集める。わたしが彼らを贖ったからだ。彼らは以前のように数がふえる。10:9 わたしは彼らを国々の民の間にまき散らすが、彼らは遠くの国々でわたしを思い出し、その子らとともに生きながらえて帰って来る。

主が彼らを離散の地から集めてくださる約束です。「合図して」とありますが、御使いによるラツパの響きです。イエス様がこう言われました。「人の子は大きなラツパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。(マタイ 24:31)」そして、帰って来たら子孫もいるので、以前よりも数が増えています。これは、恵みであります。自分たちの犯行のために散らされていたのですが、しかし主が贖われる時は、以前よりも多くの祝福を与えられるのです。

10:10 わたしは彼らをエジプトの地から連れ帰り、アッシリヤから彼らを寄せ集める。わたしはギルアデの地とレバノンへ彼らを連れて行くが、そこも彼らには足りなくなる。10:11 彼らは苦難の海を渡り、海では波を打つ。彼らはナイル川のすべての淵をからす。アッシリヤの誇りは低くされ、エジプトの杖は離れる。10:12 彼らの力は主にあり、彼らは主の名によって歩き回る。…主の御告げ。…

そして、主は強い方です。イスラエルを苦しめていた二つの代表的な強国から彼らを贖い出すことを約束してくださっています。北にあるアッシリヤ、そして南にあるエジプトです。イザヤがすでにこれを預言しましたが、アッシリヤからエジプトに至る一帯が、主をあがめるようになります(19:23-25)。そして、離散しているイスラエルの民が約束の地に戻ることができるようにするため、ナイル川も枯らしてくださいます。

そして、10章のまとめのような言葉がありますね、「彼らの力は主にあり、彼らは主の名によって歩き回る。」とあります。私たちも自分の力は主にあります。そして、自分たちが何か歩き回るにしても、主の御名によって歩きます。

3A 戦いをもたらす牧者たち 11

9章、10章は、ギリシヤ時代を背景にした終わりの日の勝利の約束でした。けれども11章にて、ローマ時代に入ります。ダニエルがギリシヤ時代とローマ時代を預言して、油注がれた者が断ち切られる、その結果、君主の民がエルサレムを攻める、そして荒らす憎むべき者が現れる、という預言を行ないました。同じように、ゼカリヤもローマによってエルサレムが滅ぼされ、そして反キリストが現われることを預言します。そしてここでは、その当時のユダヤ人指導者、つまりイエス様が地上におられた時の指導者の姿を預言しています。福音書に密接に関わる預言です。

1B 羊を屠る羊飼いたち 1-6

11:1 レバノンよ。おまえの門をあけよ。火が、おまえの杉の木を焼き尽くそう。11:2 もみの木よ。泣きわめけ。杉の木は倒れ、みごとな木々が荒らされたからだ。バシヤンの櫟の木よ。泣きわめけ。深い森が倒れたからだ。11:3 聞け。牧者たちの嘆きを。彼らのみごとな木々が荒らされたからだ。聞け。若い獅子のほえる声を。ヨルダンの茂みが荒らされたからだ。

これは、紀元 66 年から 70 年にかけて起こった、ユダヤ人反乱を鎮圧するローマの姿です。ユダヤ人が、福音書が書かれている時から、ローマに対して抵抗していたことを思い出せるでしょうか？ガリラヤ人の血を、ガリラヤ人のささげるいけにえに総督ピラトが入れた、という話がありましたね。そしてユダヤ人宗教指導者は、納税することについてそれが律法にかなっていることなのかを、誘導尋問をしました。ユダヤ人は、その抑圧的な体制と、自分たちの唯一神の信仰がローマの多神教の信仰と相容れないのを知りました。そして、カイザリヤで事件が起こりました。ユダヤ人が殺されたのです、そこから反乱の火が広がっていったのです。ここでローマ皇帝ネロが、総督ウェスパシアヌスをユダヤ属州へ遣わします。レバノンへ下りてきて、それからガリラヤ地方を攻略しました。ヨルダン側にも回りました。そして最後にエルサレムの城を攻略しました。その姿が、「レバノン」「バシヤン(これはゴラン高原)」そして「ヨルダン」の地名の中に現れています。そして、紀元 70 年にウェスパシアヌスの息子で総督になったティトゥスが、エルサレムを陥落させるのです。

そしてレバノンの杉の木は、エルサレムにある宮殿「レバノンの森(1列王 7:2)」であるとも考えられます。ソロモンがレバノンの杉によって建てたエゼキエル書でエルサレムの王の宮殿のことを「レバノン」と例えています(17:3)。そう考えると「牧者たちの嘆き」というのは、文字通りの牧者だけでなく、ユダヤ人指導者らがエルサレムの破壊を嘆いている姿と見ることができます。なぜ、こうなってしまったのか？以前、マカバイ家の反乱においては、そこに主がおられたという約束があったのに、ここではそんな敗北を帰したのか？そのいきさつを、「羊をほふる羊飼い」として主は例えておられます。

11:4 私の神、主は、こう仰せられる。「ほふるための羊の群れを養え。11:5 これを買った者が、これをほふっても、罪にならない。これを売る者は、『主はほむべきかな。私も富みますように。』と言っている。その牧者たちは、これを惜しまない。11:6 わたしが、もう、この地の住民を惜しまないからだ。…主の御告げ。…見よ。わたしは、人をそれぞれ隣人の手に渡し、王の手に渡す。彼らはこの地を打ち砕くが、わたしは彼らの手からこれを救い出さない。」

エゼキエル書 34 章に、「牧者は羊を養わなければならないのではないか。」とあります。羊に食べさせてあげるのもあって、自分たちが食べてはいけません。けれども、イスラエルの指導者らが民を虐げることによって、かえって彼らを食べ、またその羊毛を自分の着物にしたと主は咎めておられます。この箇所も同じことを話しています。羊を売っている牧者は、ユダヤ人指導者です。「主

はほむべきかな。私も富みますように。」と、図々しくも主の御名によって自分を肥やしています。そのために、主はこの地の住民、つまりローマのユダヤ属州にいるユダヤ人たちを、ローマの手に渡します。「王の手」とは、ローマ皇帝の手という意味です。紀元 70 年までに、ユダヤ人は 110 万人が殺され、9 万 7 千人が奴隷として引き連れていかれました。

2B 良き羊飼いを拒む者たち 7-14

11:7 私は羊の商人たちのために、ほふられる羊の群れを飼った。私は二本の杖を取り、一本を「慈愛」と名づけ、他の一本を、「結合」と名づけた。こうして、私は群れを飼った。

主はゼカリヤに、実演による預言を行なわせています。ゼカリヤに牧者になりなさいと命じています。ここに「羊の商人」と訳されている言葉は、「羊の悩む者たち」というのが元々の訳です。これは、神を敬っている残された民、ユダヤ人たちのことを指しています。それは、先のイエス様がろばの子に乗られた、柔和な姿につながります。主のへりくだりに触れて、それで自分に悩んでいくようなへりくだりが与えられます。その彼らの前で、ゼカリヤは牧者の役を演じ、一本が「慈愛」、もう一本が「結合」という名の杖を用意しています。

11:8 私は一月のうちに三人の牧者を消し去った。私の心は、彼らにがまんできなくなり、彼らの心も、私をいやがった。11:9 私は言った。「私はもう、あなたがたを飼わない。死にたい者は死ぬ。隠されたい者は隠されよ。残りの者は、互いに相手の肉を食べるがよい。11:10 私は、私の杖、慈愛の杖を取り上げ、それを折った。私がすべての民と結んだ私の契約を破るためである。11:11 その日、それは破られた。そのとき、私を見守っていた羊の商人たちは、それが主のことばであったことを知った。

これは、イエス様がユダヤ人指導者を嫌い、そしてユダヤ人指導者もイエス様を嫌い、そして彼らがイエス様を嫌ったために、ユダヤ人らがローマ人の手に渡されたことを表しています。8 節の「三人の牧者」が誰であるか、二つの意見があります。一つは、当時のユダヤ教指導者、パリサイ派とサドカイ派と律法学者のことを指していると言います。もう一つは、指導者を構成する三つの役職、つまり、王、預言者、祭司を指しているというものです。エゼキエル書やエレミヤ書や他の預言書にも出てくる、「牧者」という言葉は王、預言者、祭司の総称として使われているからです。たぶん、後者のことを指しているのでしょう。

このように、イエス様とユダヤ人指導者との確執は熾烈になったことをここは表しています。イエス様が十字架で知られる数日前に、八回、「忌まわしいものだ。(マタイ 23:13)」と言われて、彼らの行なっていることを咎められました。そして最後に、主は、彼らが流した血はこの時代が報いを受けると宣言されました(36 節)。そしてエルサレムがローマによって陥落するのを見通して、嘆いておられます。「ああ、エルサレム。エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石

で打つ者。…(37 節)」これが、ゼカリヤが行なった発言、「死にたい者は死ね。隠されたい者は隠されよ。残りの者は相手の肉を食べるがよい。」と言った言葉です。メシヤ、良い牧者を拒んだがゆえに、ユダヤ人はローマによって殺されて、包囲されたエルサレムの中では互いに殺し合い、また飢えた人は赤子の肉を食べたりしました。

そして慈愛という杖をゼカリヤが折ったのは、イスラエルを神が慈愛の目を持って眺め、それを守られるという契約を破ることを意味していました。彼らは、また集められる時まで、神はこの契約を思い出されることはありません。

そして興味深いのは、「私を見守っていた羊の商人たちは、それが主のことばであったことを知った。」とあることです。ここの「羊の商人」は「羊の悩む者たち」ですね。もちろん、ゼカリヤがこれを行なうのを見ていた、ユダヤ人の残りの者たちが主の言葉であると悟ったという意味ですが、預言的にもエルサレムをローマが破壊することを、当時のイエスをメシヤとして受け入れたユダヤ人たちは悟っていました。彼らは、66年に始まったユダヤ人反乱、そしてローマがエルサレムを包囲した時に、ルカ 21 章 20 節から 24 節にあるイエス様の警告を思い出しました。「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。…」ユダヤ反乱軍が、ローマの補給線を断ちました。それでローマが包囲を一時解除した時に、彼らはアラバのほうに逃げ、そしてヨルダン川沿いにあるデカポリスの町の一つである「ペラ」に共同体ごと避難しました。そのため、70年にローマがエルサレムを破壊した時に、信者は誰一人として死にませんでした。

11:12 私は彼らに言った。「あなたがたがよいと思うなら、私に賃金を払いなさい。もし、そうでないなら、やめなさい。」すると彼らは、私の賃金として、銀三十シケルを量った。11:13 主は私に仰せられた。「彼らによってわたしが値積もりされた尊い価を、陶器師に投げ与えよ。」そこで、私は銀三十を取り、それを主の宮の陶器師に投げ与えた。

この預言も見事に成就したことを、私たちは福音書の中で確認することができます。イスカリオテのユダが、この金額で祭司長らからイエスを引き渡す任務を受け、その後には彼は後悔して、彼らにその金を返しました。祭司長らは、それを神殿に戻すことはできないとして、陶器師の畑を買うことにしました。ところで「銀貨三十シケル」という金額ですが、出エジプト記 21 章に、自分の家畜の牛が人の奴隷を突いたら、その奴隷の主人に銀貨三十シケル支払いなさい、という定めがあります(32 節)。つまり、値打ちは奴隷のそれと変わらないことを示していたのです。

11:14 そして私は、結合という私のもう一本の杖を折った。これはユダとイスラエルとの間の兄弟関係を破るためであった。

ローマに対するユダヤ人反乱によって、ユダヤ人が滅んだのはローマのせいだけではありませんでした。エルサレムの中では、ユダヤ教の熱心党員が先鋭化し、分派・分裂しました。互いの備蓄を捨てたり、殺しあったりしました。「結合」という杖を折ったのは、そのためです。ユダヤ人の中に一致がなくなってしまいました。

3B 愚かな羊飼い 15-17

11:15 主は私に仰せられた。「あなたは、もう一度、愚かな牧者の道具を取れ。11:16 見よ。わたしはひとりの牧者をこの地に起こすから。彼は迷い出たものを尋ねず、散らされたものを捜さず、傷ついたものをいやさず、飢えているものに食べ物を与えない。かえって肥えた獣の肉を食らい、そのひづめを裂く。11:17 ああ。羊の群れを見捨てる、能なしの牧者。剣がその腕とその右の目を打ち、その腕はなえ、その右の目は視力が衰える。」

良い牧者であるキリストの預言の後には、愚かな牧者が出てきます。彼は、偽キリスト、つまり反キリストです。ユダヤ人は、真のキリストを受け入れなかったから、偽のキリストを受け入れるようになるのです。「わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。(ヨハネ 5:43)」私たちは、真理を受け入れないと、代用の偽物を受け入れます(2テサロニケ 2:10-12)。

紀元 135 年に、第二ユダヤ人反乱が起こりました。シモン・バルコクバという指導者が現れました。多くの人が彼についていきましたが、ラビのアキバと言う人がバルコクバをメシヤだと宣言したのです。その時までこの反乱に同情的であったユダヤ人の信者たちはこれに賛同することができず、身を引きました。この後、イスラエルの土地全体が最悪の状態に陥り、ローマによって荒廃しました。

同じようなことが終わりの日に起こります。まことのキリストを受け入れないので、彼らは反キリストをメシヤとして受け入れるのです。ここにあるように、反キリストは傷ついた者を癒さず、飢えている者に食糧を与えず、かえって食べてしまう人物です。平和と救いを約束しながら、人々を虐げ、殺していく人物です。けれども、主はこの愚かな牧者を滅ぼされます。「剣がその腕とその右の目を打ち、その腕はなえ、その右の目は視力が衰える。」とあります。腕は力、あるいは武力を表します。目は知力を表します。その二つとも神は反キリストのうちからなくしてしまわれます。反キリストは、再臨のキリストによって滅ぼされ、火と硫黄の池に投げ込まれます。

ここまでは9章から始まった一つ目の「宣告」あるいは「重荷」の内容です。なぜ重いのか？それは、平和の君、へりくだった柔和な方を、自分もへりくだって心にお迎えすれば救いがあるのに、むしろこの方を嫌がり、受け入れないことによって災いを自分の身に招くという重みです。12 章以

降に、再臨の主の姿を見ることができます。そこで彼らは、自分たちが拒んだ者が実は、主ご自身であったことを悟り、初子を失った時のように嘆きます。初めて来られた時は拒みました。そして愚かな牧者の中で迫害を受けています。その中で救いを求めた時に現れてくださった方は、自分たちが突き刺したイエス・キリストご自身だったのです。そして主は、憐れみと恵みをもって彼らを敵の手から救い出してくださいませ。

私たちにも、良い牧者についていくのか、愚かな牧者についていくのかの選択が与えられています。良い牧者に従えば、平和があります。愚かな牧者に従えば虐げがあります。良い牧者にしたがう羊は、自分自身も悩みの羊にならなければなりません。自分の心を貧しくしないとけません。自分には何もないことを告白しなければなりません。その砕かれた魂、へりくだった心に、神は慈しみの聖霊を注いでくださいます(ヤコブ 4:6)。